

信毎俳壇

坊城俊樹選

- 桑を食む蚕の音の子守歌
(長野市) 山田登志夫
花筏流れに任す恋心
(下諏訪町) 中村 久
また雨に濡れて牡丹にある疲れ
(埼玉県美里町) 川崎 彰典
竹筒に水子地蔵の風車
(長野市) 松本 宏要
廢屋の隅に連翹暮れ感ふ
(大町市) 原田 勝
復興の大漁旗が揺れる春
(松川村) 岡 豊村
ゆつたりと鯉の背に乗る花筏
(須坂市) 牧野 勇水
代掻きて水平線をつくりけり
(伊那市) 中村 茂子
風の記憶たどりて探す沈丁花
(佐久市) 町田ゆかり
樽ワイン静かに眠り世種かな
(宮田村) 金本 牧子
佳作
出棺を知らずふおーん花は葉に
(松本市) 辻 佳代
初夏の風届いてますか母の墓
(佐久市) 大場 和晴

一句目、「蚕」が餌となる桑を食べる時の音を「蚕時雨」と言うらしい。時雨が降る音の「サーッ」という音。その音はあたたかき蚕たちへの子守歌にも聞こえてくるという。幻想的ですがある句。二句目、川を流れる花筏とは可憐である。それはまた恋心を乗せて流れていくようにも感じる。三句目、牡丹が咲く頃はまた雨も多い。その雨に打たれた牡丹はどことなく咲くことに疲れたみたい。

選評

今井 聖選

- 大汗をかき力まだありにけり
(箕輪町) 向山 政俊
カーネーション帰りの運き母の部屋
(塩尻市) 百瀬 はな
春風に匂ひの違ふけむりかな
(東御市) 大塚久仁男
右折用レーンのやうな春の虹
(塩尻市) 神戸 千寛
朝桜からすの羽音さなはたと
(伊那市) 小切 三郎
腰痛を騙し半日芋植つる
(松本市) 小林 幸平
宵の春地酒の栓の硬さかな
(辰野町) 矢島あさ子
植木鉢倒して春の風となり
(長野市) 宮沢 信博
小遣ひのある子ない子やこどもの日
(須坂市) 丸山 葵子
本棚の隅に「満蒙」昭和の日
(坂城町) 柄沢 満則
佳作
トンネル抜け蛙の国へ入りけり
(長野市) 松本 宏要
極楽のこゝ浦公英の咲き荒ぶ
(佐久市) 岩下サク江

一句目、力を出すから汗が出る。汗を出すほどの力が備わっていると考えると「まだありにけり」の希望的な述懐につながる。二句目、この句の母はつつましく優しい通念的な母ではない。時には夜遊びもする不良の母なのだ。そこが魅力。通念に何の魅力があらうか。三句目、匂いの違う煙を春風が運んでくる。この発見だけで実に新鮮。四句目、春の虹を車線に例えた。強引だが「詩」が感じられる。

選評

神野 紗希選

- ケブラー1649c碧しソーダ水
(小諸市) 加藤 陽介
鳩出なくなりしハンカチ傷に巻く
(松本市) 久我 綺乃
唐路の穴から覗くラブレター
(伊那市) 中村 茂子
雲にふれ落ちたる岨の桐の花
(上田市) 竹内 重美
通信簿ほつたらかしに頼料すくう
(安曇野市) 平 至行
嬰兒の肌やわらかに柿わかば
(中野市) 田川 寿男
初夏のガラスコップの雫かな
(佐久市) 佐藤 勝子
きらきらと波が波追ひ夏ささす
(須坂市) 丸山 葵子
すかんぼやのつと伸びたる雨あがり
(飯島町) 久保田喜喜
おかあさんしよかのすきないろはなあに
(中野市) 風間 一乃
佳作
笑む夫にシャッターを切る花杏
(埼玉県上尾市) 小村 勝子
咲いてこそここに我在り山桜
(中野市) 有賀 敬子

一句目、約300光年彼方の惑星ケブラー1649cは、地球に似た星として知られる。ソーダ水の涼やかな色に、青い地球と、はるか宇宙の惑星を思う。二句目、手品に使ったり傷を保護したり、汗を拭うほかにハンカチの使い道はいろいろ。鳩が出せなくても傷の手当てができるように、この世に無用の存在はないのだ。三句目、ラブレターの熱情も路の穴からのぞけば、客観視できそう。随々と楽しい。

選評